

釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 5

365連休

鹿島釣狂

河井良雄追悼大会

早朝、携帯が鳴った。相手は山田勲と名乗った。26年10月26日、竿道会の大会でタカノハを狙って参加した折に、エリモ町境浜で一緒した釣り人だった。その時は海が荒れて全く釣果が無かったが、私の隣で竿を出していた御仁が山田氏だったのだ。河合塾大会を世話人代表として主宰しており、是非その大会に参加して欲しいというものだった。釣遊会の大会に参加して頂いている佐々木忠義氏も参加するという。その日は女房と一緒に「長屋の花見」という観劇を予定に入れていたが、ご丁寧な案内に恐縮してしまって参加することに即決した。

4月26日、佐々木氏と岩見沢中央バスターミナルで待ち合わせて、私の車で札幌の集合場所に向かった。入釣場所に迷っていたが、佐々木氏が軽臼平盤に入るので一緒することになった。軽臼平盤は予めから入釣してみたいと考えていた釣り場だ。本日の天気予報では波が1.5m→2mとあり、平盤に波が乗ってきているような場合は軽臼漁港に逃げこまなければならないことも考えられる。

集合場所では、緊張しながらも参加者たちと挨拶を交わしたが、中には知った顔も見受けられた。バスの中で主催者である山田勲氏（竿道会）の格調高い挨拶に続いて、道釣連副会長である植田幸男氏の歓迎のお話があった。バスの座席は佐々木氏の横に指定して頂き、なにかと配慮してくれていた。世話人幹事長である柳原勝巳（釣り友の会）が大会の詳細事項を発表していた頃には、すっかり打ち解けてその大会の雰囲気になじむことが出来た。途中、横澗港に立ち寄り、故河井良雄さんの奥さんのメッセージが紹介され、献花と黙祷を捧げた。

私は予定通り軽臼平盤で佐々木氏と共に下りた。平盤の付け根でホッケを狙った釣り人

が5名ほど入っていたが平盤上には釣り人の姿はなかった。一旦荷物を置いて平盤の左に付いた出岬の様子を探ってみた。なんだか3番目の細長い平盤が釣りやすそうに見えたのでそこで釣り場を設定した。波が高く途中の低い切れ込みを渉るのに慎重を期した。佐々木氏は自分の荷物を置いた場所が分からなくなり、あちらことらとライトの光が彷徨っていたが、やがて一所で落ち着いたようだった。

私が三脚を立てた平盤の先端に当たった波飛沫が降り注いでくるので、少し下がったところから打ち始めた。岩の張り出しがあって近投では道糸が岩に擦れてしまうので遠投にした。カジカが釣れた。しかし、アタリは続かない。盤の反対側に竿を移動した。40cm弱のアブラコが釣れた。続いて35cmほどのもの、そして、40cm強のアブラコも釣れた。なんだか調子が良くなってきた。



釣り場に朝陽が昇った

釣り場に朝陽が昇った。朝陽のシーンは、ベートーベン作曲「ピアノ三重奏曲7番大公」の調べを想わせる。波が押し寄せ、引き返す。時には怒濤となる時もあるけれど、ほとんどがピアノとバイオリンとチェロの掛け合いで、今日の軽白のような穏やかな波を感じるのだ。その曲調の合間には、海底に大物の影が潜んでいたり、岩場に張り付いていた大物がエサを追って出てくるのを想像したりする事が出来るのだ。

朝陽が昇ると、魚たちの活性が上がったのか、ホッケが掛かるようになった。身体の動

きも活発になり、汗ばんで来るようになったので羽毛のジャケットを脱いでしまった。ホッケが釣れ続いた。掛かりがよかった甘エビは既に無くなってしまったが、カツオに大きなホッケが掛かるようにもなった。しかし、締め切り時間が来てしまった。潮だまりに放しておいたローソクボッケをリリースして竿をしまった。



筆者の釣果

昼食は寿都「ゆべつの湯」でとった。なにより温泉付きだったのがよかった。冷え込んだ身体を温め足先までのこぼりを解いた。昼食後には、表彰式が行われた。

重量優勝は山中で釣りをした島川昌幸氏で45cmほどのホッケを4本揃え、カジカの大物を提出した。身長優勝は、軽臼平盤の右で竿を出して50cmのアブラコを釣り上げた木村利幸氏だった。副賞には参加した方々のご芳志でメロンや米、ビール、酒、椎茸、デコポンなどが提供された。その副賞を告げられる度にドッと歓声が上がった。私は、11位だった。デコポンと米5kg、肉厚椎茸をいただいた。

圧巻だったのは、植田幸男氏の仕掛がお土産として全員に手渡されたことだ。何度も釣り雑誌等で紹介された逸品だが、手にしてみるのは初めてだった。私にはどうも気付かないような工夫が随所に見られ、釣遊会の皆さんにも是非使って頂こうと大会の景品にと考えた。それを察知した周辺の方々が自分のも使ってくれと差し出され、沢山の仕掛が集まってしまった。ありがたい。

次の日、兄夫婦がお袋を連れて来訪した。お袋には「北海道の釣り」2月号に掲載された記事を「母さんのことを書いたから」と見てもらったが、直接の反応はなかった。しか

し、何度も何度も読み返してくれて「こんなこともあったねえ」と呟いた。お土産に、3月に釣った背割りチカや昨日釣ったホッケの開きにアブラコ、肉厚椎茸などを持たせた。



入賞の顔ぶれ 前列、身長優勝：木村利幸、総合優勝：島川昌幸、後列、3位：大沼光男、準優勝：樫山靖治

苦小牧三流会

4月30日、もうそろそろ苦小牧港菱中造船所前にもクロガシラが来てもよさそうだと出掛けた。への字岸壁には先行者が1名いて、船曳と名乗った。他には丸太に1名、ステージにチカ釣り師2名が入っていた。アタリは皆無で、おのずと船曳氏と話をすることになった。

せたな町鵜泊漁港で釣りをしていたが、愛車ハイエースの1年点検のために苦小牧に戻ってきた。そのついでにこの港で釣りをしているのだ。点検が終わればまた鵜泊に向かおうと思っている。

鵜泊漁港では好ポイントを押さえて釣りをしていた。すると、真夜中に札幌の釣り会の連中がやって来た。「ここは俺の場所だ。どける！」と無理を言うので、自分の名前を名乗ったが、相手は名乗らない。再度聞き返すと「字が読めないのか」とリュックを指差すので見てみると奴の名前が書いてあった。そういう自分のことしか考えられない輩はいるものだ。さて、夜が明けてからその場に戻ってみると、今度は他の釣り人がポイントを押さ

えていた。彼は35cmほどを頭に真ガレイを大釣りしていた。そして、快く竿数を減らし隣スペースを広げてもらって釣りをさせてもらった。自分は10枚ほどしか釣れなかったにもかかわらず、気持ちは晴れ晴れとしていた。

先ほどから、どこかで見覚えのある顔だと思っていたが、あなたは確か鹿島釣狂さんだよね。「北海道のつり」に掲載された「釣れ釣れなるままに」を愛読している。同じ文章を何度も読んだのでそら覚えしているぐらいだ。貴方が誌上で語っている「佐助」はキススペシャルの竿先を特注したものに取り替えて1本20万ほどかかっているのだよ。私もその竿を振らしてもらったらなぜだか飛ぶのだ。「武蔵」はおそらくあいつのことだろう。「くの一」もよく知っている。

私は、三流会の船曳直人という。曳き網漁の機関士をしていて、すけそう、サケ、キンキ、目抜き（幸神目抜き）などを追って漁をしている。目抜きは実に美味しい魚だ。最近、値が上がってきたが、漁師が買ってでも喰いたい魚のトップをいくだろう。

彼の隣で竿を出させてもらってから3時間ほど経った。まだ誰にもアタリは出ていない。彼の竿を見ると「日々ダイエット」と「苦小牧三流会」のロゴが入ったワッペンが貼られていた。その彼が米を研ぎ出してご飯を炊き始めた。炊きあがりのいい臭いが私の鼻孔を擽ると、今度はモヤシ入りのラーメンを作り始めた。そして、大盛りのご飯をよそったどんぶりにバターをのせて、出来上がったラーメンを啜りながら掻っ込んだ。「日々ダイエット」のロゴが泣いていると彼に話すと、まあ、こんなこともあると豪快に笑った。

130mほど遠投していた彼の竿にアタリが出た。話し込んでいる最中でも彼の眼はその変化を見逃さなかったらしい。手慣れた動作で引き寄せると45cmほどのクロガシラだった。船曳氏が持っていけというので、遠慮無くもらった。私には結局一度のアタリも出なかったが、気持ちよくその場を離れることが出来た。



船曳直人氏「ほら持っていけ」

歌島の根ボック

前野会長からホッケ釣りに誘われた。嵐氏も一緒だということで、一も二もなく同意した。釣り大会とは違ってホッケが狙いだから、荷物は極力少なくした。ゴロは持たない。コマセも持たない。ゴロ仕掛・ネット仕掛は持たない。しかし、ロケット駕籠付きの仕掛とカゴに入れるアミは持った。

5月2日、前野氏が嵐氏を乗せて午後1時半に迎えに来て、高速を使って一路寿都へと向かった。歌島漁港周辺の岩場で釣りをしようということになっていた。歌島には明るい内に着いた。大会ではいつも暗い中で準備しているのだが、明るいと作業がはかどる。目指す岩も見つけやすい。

各々が狙った場所に三脚を立てた。アタリはない。嵐氏が40cmほどのアブラコを上げ

たが浮かない顔をしている。今日はホッケ狙いなのだ。私のところは結構根掛かりがひどい。少し離れた前野氏のところへ様子を見に行っただ。彼もアタリが出ないと呻いている。

自分の釣り場に戻ると竿が1本足りない。大物が竿を持って行ってしまったのだろうか。すると、嵐氏が「素晴らしいアタリが出たので上げておいたから」と平然と言う。平盤には大きなホッケが横たわっていた。もったいない、初めてのアタリだったのに……。自分で上げたかった。続けてホッケが釣れた。40cmを超える良い型だ。そして似たようなアブラコを追加した。夕暮れになり周辺が見えなくなった。それで、3人して1升瓶をまわしながら酒を飲み、遅くまで釣り談義に花を咲かせた。よき時代へのこだわりを捨てきれない男たちは、酔いが深まるごとに移ろい、まだ見ぬ大物に思いを馳せて語り合った。そして、日にちを跨いだところで眠りについた。

2時ころに前野氏のごそごそやりだした。眠りについてから1時間ほどだ。眠ろうとしたが眠れないのだそうだ。そして、今日の計画を話し出した。今日は1時間ほどやって駄目ならどこかに移動しよう。嵐氏も私も爛々と目が冴えてきた。東の空が薄明るくなってきたころ、私達は準備してまた釣り場に立った。嵐氏と私は同じところで、前野氏は違う盤に出ていった。

アミエビを詰めたロケットカゴ仕掛にホッケが来た。45cmの大きいものだ。それが続いたので、嵐氏を呼んだ。しかし、彼のプライドが許さないのだろう。すぐにはやってこない。そして、何度も誘うものだから、渋々私の隣で竿を出した。私はホッケ釣りなので、魚の食い込みがいいようにと軟らかい竿を用意してきた。チョンチョンの後ググッと竿先が刺さり込む。嵐氏は堅い竿にネット仕掛だ。アタリがあってもなかなか魚がエサを銜え込まないようだ。チョンチョンの後、アタリが止まってしまう。

夜明けは雲の縞模様が濃くてヒンヤリとした冷気に包まれていた。そして、時間が経つとともにその涼やかさが嘘だったように暑い日照りになってきた。前野氏を呼んだ。二人が限界の場所なので、私は前野氏に釣り場を譲って片付けた。前野氏も嵐氏もそれぞれ20本ずつ釣り上げたようだ。それぞれ隣家に配る約束があったようで私のホッケも混ぜてもらった。

帰りは茸王国に立ち寄り昼食をとった。余市では渋滞だった。朝のテレビ連続ドラマの「マッサン」効果で観光客がどっと押し寄せたようだ。前野氏は真夜中に1時間ほどの睡眠をとっただけなのに、一度も休むことなく岩見沢に帰ってきた。全くタフな男である。



丸々としたホッケが釣れた。私のバツカンは45cm



嵐氏と前野氏に釣り場を譲った

大きいものは開きにして乾した。次の日干し網の中を覗いてみると上手い具合に干せたようだ。表面に薄い膜が張って中は光り輝いていかにも上手そうだ。新聞紙や、サララップ、ビニル袋で包んでから冷凍にしてみた。どの方法がよいのだろう。

孫がやって来た。旦那は仕事の都合で次の日だから、大きいものをより分けて冷蔵庫に保存した。評判はどうだったかって？ 彼の表情からしかくみ取れなかったが、その顔は「ひえー美味しい」と読み取った。

岩見沢釣遊会・とんとん会合同大会

「とんとん会」の会員であるY氏が研修派遣されていた厚生労働省の勤務を終えて帰ってきた。今回の岩見沢釣遊会・とんとん会の大会では、2年間のブランクがありながらもワスリで身長賞を取った。49.5cmのアブラコの大物を上げ、総合成績は4位だった。彼は、東京周辺でも船釣りには行っていた。釣り道具等は釣り船で全て整えられており、クーラーの持参だけで釣りをすることが出来たのだそうだ。しかし、全てが船頭任せで、投げ釣りの面白さに比べるとなんだか物足りなさを感じていたようだ。彼が派遣された時期は、丁度、ゴーストライターの事件が世間を賑わしているときであり、職務上の関係でその対応に追われていたということだ。

数年前、佐村河内氏を特集したNHKスペシャル『**魂の旋律～音を失った作曲家**』を見た記憶がある。交響曲第1番「HIROSHIMA」や東日本大震災の被災者に向けた「ピアノのためのレクイエム」は物悲しい曲想で私の心にも響くものがあった。そして何より、全聾の天才作曲家、被爆二世として生まれた作曲家は突然に一切の聴力を失って絶望の淵に沈む。命を支えた盲目の少女との邂逅。過酷な心身の苦悩を超えて紡ぎ出されたとされるストーリーが胸を打つものがあったのだろう。そして、彼は現在のベートーベンと称されていた。

耳が聞こえない作曲家という触れ込みの佐村河内のゴーストライターを18年間務めた新垣隆氏は、確かに、記者会見では、頼まれれば断り切れないというような人の良さそうな人物だった。「苦勞を乗り越えて初めて喜びがある。」といったベートーベンとは真逆の佐村河内の不貞不貞しい態度とはまるで違っていた。その影武者は、一連の騒動後、テレビ出演、雑誌のモデルなど表舞台に立つようになった。先日も、某テレビ局の番組で晴れやかに軽快なピアノを弾いていた。どうなのだろう？ それでいいのだろうか？

5月23日、天気予報は晴れ、波1.5m。南の風強く、朝方は南西の風に変わり弱まるとある。私は当初の予定通り軽臼平盤に入った。釣り人は誰もいない。河井塾の大会で下見をしているのでスルスルと平盤の左に突き出た一番前の出岬に出た。しかし、少し波が高いようで平盤の上に波が乗ってくる。荷物を一旦そこに置いてから、竿袋だけをもって周辺を散策する。先端より2番目の出岬が高くて波も上がっては来ていないのでそこに

三脚を設置した。

アタリが出ない。2時間ほど経過してようやく小さなアタリで蠟燭ボッケが上がった。続けて小ゾイにチビアブラコ。5時頃、竿先にグイングインと大きなアタリが出た。大物だ。リールを懸命に巻いて引き寄せる。グググググッと竿先が刺さり込んでいく。ようやく平盤の手前まで寄せるとバシャバシャと暴れ出す。50cmほどの大アブラコだ。抜き上げるのに躊躇しているとまた深みへともぐり込んでいく。軟竿はグニャリと曲がっている。はたして抜き上げることが出来るだろうか。竿先を海面まで目一杯に送り込んでから引っ張り上げるようにした。外れてしまった。ハリが外れてしまったのだ。

7時ころ35cm程のカジカが上がった。そして、ホッケが少しずつ大きくなってきた。30cmほどのクロガシラも釣れた。しかし、期待していたような大物を上げることは出来なかった。優勝は佐藤和郎氏で矢追、準優勝は荻野一利氏で新甫川、3位は矢根政仁で歌島平盤での釣果だった。

疲れて帰ってきて「明日は日曜日なので、明日片付ける。」と言っただけのんびりしていると、「明日も明後日も休みでしょ。」と女房が言った。「それでは、明明後日も休みだから三連休か。いや、これからは1年中365日休みなんだ。これからの人生は休み続きだ。それじゃ今日片付ける必要もないわけだ」とソファーにごろりと横になった。